

こころをつなぐまちづくり

人権シリーズ vol.57



この作品は、国見町小中学校児童・生徒人権作品展に応募された作品の一つです。なお、応募された作品は国見町人権フェスティバルで展示し、作品集の発行を予定しています。

『生きる』JUSINRYU



国見中学校三年 甲斐 優希

私たち三年生は六月の下旬、福祉センターに行つて幼児との触れ合いや妊婦体験などをしました。妊婦体験では、実際のおなかの大きさと同じくらいになるものを首にさげました。私は、それをつけてもらうとき、あまりの重さでよろけてしまいました。下を見ても当然足元は見えず、階段などの上り下りは危ないし大変だろうなと思いましたが。改めて、お母さんはとても大変な思いをして私を生んでくれたんだなと思うと、『感謝』では表せないほどの気持ちになりました。お母さんが私を産み、家族が私を育ててくれたから、今私はこうして毎日を生きています。嫌な思いをすることもありますが、それは私が『生きていく』という証です。『生きる』ということは、今の私たちにとってはそんなに難しいことではないと思います。ですが、世界では戦争などで何も関係のない人たちの命が奪われています。日本でも児童虐待などの事件が多く起こっています。

「言うことを聞かなかったから」「泣き声がうるさかったから」などの親の言葉を聞くとその子は一体何のために生まれてきたのだろうと思います。虐待をする人にも個人的な理由があるかもしれませんが、自分勝手な考えで相手の命を奪うという権利は誰にもないと思います。特に母親が自分の子どもを虐待したという話には、どうして？と思います。十月月間も大変な思いをして生んだ子どもを自分の手で殺してしまふなんて、私にはできません。殺人事件などで犯人の話を聞いても、その人を産み、育ててきた家族の気持ちを考えたりはしないのかと思います。どんな理由があつても、他人の命を奪うという行為は最低なことだと思います。虐待を受けたり、命を奪われた人にも等しく生きる権利があるはずですが、それなのに、苦しい思いや悲しい思いをしたり、これからの人生を絶たれてしまうのはおかしいと思います。

また、自殺をしてしまう人にも同じようなことを思います。せっかく両親から与えられて、それまで育ててくれた命を自ら絶つことによつて、周りの人がどれだけ悲しむかということ、考えなければいけないと思います。その時はつらくても、そこを乗り越えることができれば、その先には楽しいこと

が待っていたかもしれません。なので、自ら命を絶つということはあつてはならないことだと思います。

これから先、虐待や幼い命が奪われてしまう事件、自殺などが減るのは難しいことかもしれませんが、一人ひとりが命の大切さを考えることができる社会になれば、少しでもこういう事件は減ると思います。私は、たつた一件でも二件でも意味のない死がなくなればいいなと思います。

好きな音楽を聞いたり、くだらないことで友達と笑い合えたり、そして何より、今生きているというあたり前のように思えることがいけば幸せなことなんだなと実感しました。この先も私は、周りの人たちへの感謝の気持ちを忘れずに、悔いの残らない毎日を送りたいです。自分の命も人の命も大切にできる人間であり続けたいなと思います。

〜第4回国東市隣保館まつり「こころの川柳」応募作品〜

こころつなぐまちづくりをあなたにかいて
その言葉問いつかけてみて自分にね

安岐町 永松 紀代美
武蔵町 屋宜 寿菜

お知らせ

☆国東町人権フェスティバル
期日 3月5日(土)
場所 アストくにさき
問い合わせ 教育委員会生涯学習課
☎0978-72-2121

☆人権ビデオ上映会(隣保館)
テーマ 女性の人権(ジェンダー)
2月19日(土)午前10時〜正午

☆同和問題学習会(隣保館)
テーマ 部落青年として
2月24日(木)午後2時〜4時
問い合わせ 国東市隣保館
☎0978-68-1172